

藩鑑卷之五十六目錄

い部九

松平新太郎源光政

藩鑑卷之五十六

松平新太郎源光政

一 歩言よ曰く松々君子よたしくたしく誠く
たやうとくく下きく小りまの地とも操はし
能くち條り正見事くふる不も苦く交わ
くも同事くく小革くく小蘭とも君子よ
得云一りと是も誠くくやうとく有る公に

るりあふ所も無く遠くよそい音いも無く
遠くはたふないたけく重ののいや
漸くふ少つてのいものなり竹も君子よ
等云く誠すまふく直さん事を
者よ梅と賢人と世るよくとも公は
遠いとおもひわたりんといふもめと
賢人よ梅のつんとあくるよ似たり
しよこやよいふけよ海の賢人の唯つん

とすくいや大なる公は遠くをり 信藩典録

一 涉言く曰く昔齊は國の右齊の大山よ
登つてちちまよ語らく我國是よ國
よ景の勝まける事化國よ一國よ
少く減る事なけきよ死するよるるわ
少く竹事よおもろき事なりと云く
大夫の中よを云とて笑ふものあり君
のいよく汝は我言と笑ふよ云く念ふ



けきし尚も笑ふ君のいしくも笑ふ子
細とまきんといひり笑ふ共曰く死とりよ
るあるは君の心手くも齊の國入を死
しる事なくも齊の先君齊國と居れば
ひく君の心國といひる事なくも笑ふをり
公の曰く右のおくはゆる事とせ世人
がふよ外くも事と外くは儀儀も
めき事なり 同上

一 又曰く顔子一簞の食一瓢の飲もとまきと
好む面白くも笑ひていなく求るころをい
ひく是れとありも笑ひてい九情の樂は何ぞ
ふりてりともや面白くも笑ひていなるもの
なり故に君子の樂は淡くもいりてかきふ
ともなくも小人の樂は一旦ハ殊外面白りも
ともなくも厭ひていりていなるものなり
君子とて樂は外にありていなくもいなるものなり

去後年作より是く似たりしかば風吹と云ふ
りん〜風吹と云ふいふと昔〜の婦人
君の風吹と云ふりて〜下り〜
人あり樂しむ者あり皆かば〜又〜
腹と物と〜食〜由風〜
に面倒あり風吹と倚る人あり〜
乞食〜劣り〜唯〜境界〜
堺界と云ふ〜勤め外〜

樂々々々く山 同上

一 歩言と曰く今後のお出く干将莫邪
釵よあり〜
是ハ如何なる孽と云ふ〜
当り哀む〜
〜又知行〜
〜
了誠〜我ハ竹の役〜

と云ふ思き戒めを鼻の先を
感ひあり目上

一 忠節より多く毎より多く忠の
美事かく行ふもの稀かり忠は己と
忠と忠より忠も皆かきう然とも
り不足と是えより不忠の生るると
志は以故謙と作せしむる忠を
慢公より知る忠ありふと忠は

そ忠言あり多可歌るきこも
世信より忠不忠ありは謙と作
ふせよ少なり謙は履くく慢公は
多美と謙あり目上

一 公平常易謙の卦の辭と濁

だふり天道虧盈而益謙地道變
盈而流謙鬼神言盈而福謙人道
惡盈而好謙

君則
有斐錄

花園會約

學校壁書

光政

一 吉人の善となす日は下は上とせらるるもの
に何事とや良智れ人ふととるるを職
に若くも職に任せさるるに不快ゆへを
此に我輩一う馬の善よけまじく武士
の名とせらるる人々まじく武士の徳に厚く
武士の業と勤まじく自ら良智に耻

取らりて武士を先と育むるは
古の徳なくしては叶ふべし徳の
公よあると仁義とよまじく明とよまじく
愛あるは支徳なり明とよまじく言路の
武徳なり良智明をまじくは徳もまじく
我よ具りて是故に今諸士の舎約良智
と徳とをまじく系とす誠と徳とをまじく
けせしめ聞かざるに聖教とまじく

くまゝ同志教輩集まり三雅の時
いゝ黙止まゝもや三雅の福とゆゑ
當く花と悠々として飽暖と安
けしと空ふせい文武明るるに
一生の心も人やぶつて戒むく
甚なり文武文と徳あり藝あり徳を
於苗の生るまのやう藝に耕耘の
事のみ文武といふ耕耘の事

一 公の生涯と生長養育と教
学古長一徳一聖苗と結はん事
何の幸ひも是も志らんや

一 毎日清晨と盥掃と衣服と整へ
聖經賢傳と熟讀もく文武の拙
者も孝經四書の文と讀或は先学著述
の及名書と讀觸發載信印証の三益
と求る公と冊子のよき放しは

こゝろをまよ

一 食後よ六射と学ふ一 射をく後鎗
た刀と習ふ一 馬疾砲は人より射より
習ふ一 ことものあるは擧ひし任をく可なり
武藝ハ治平の具戈と止の義をまは和
一 お捕けく取て争公殺床と校じつす
るべき

一 書數ハ文武の藝術よ於てそ便しき
るべき

一 礼樂ハ六藝の公重き物なり礼ハ公の敬
と顯ハ一樂ハ心の和と速たり礼樂は
学へと欲す人先は公と存養より一
一 従ハ礼樂と学ばる能はざる人も
も一 敬和は徳あり毎事各神の礼と
行い目も小名考の樂と鼓せん故一
君の礼樂ハそ身としるべき

一 礼用軍用缺く處々以困窮と恤み
下氏と救ふより分限と意し有る
家若飲食衣服悉物妻子の私用と於
くは儉約と考へて之を以て於て儉約
をす人、或は礼用と制式、軍用と廢る
或は慈悲利濟の心を以て人あるは世俗を
恥しめざるを以て恥とせざるを顧有る
く迷と云ふはまふ

一 朋友の交自化敬讓ありて和睦一温
恭自虚ありて益と爲ると心して威儀恣
よし言活早し争ふ浮氣と以て交
る下流の凡俗なり化人の志求せざるのあ
るに於て一般に之を重んずるを恭敬の公
と云ふは色欲の雜法を以て禁めし況
や淫行とや凡は必ふ由る所は言ひ
公の聲を以て恥と爲る處

一 朋友の交一社の公と存一と困窮とね
故一と業とと物我の我言と敬
つと便利とと物我の
言念奔るとと一社の良智と味と一
同
親愛とと止と魔障とと治と提撕警
覚とと

一 朋友の交通と規一善と勸とと其
実の友とと過とと規するると

善は去りて勸めざる同志は同志お切確ま
の本意よありつに其罪を咎め
其是正争ふも又同志切確まの始願よあ
らざる是正規よ知正しく是正勸るに時
正しく是正規よ知正しく是正勸るに時
叶らざる事あり心正虚に自ら正せよ
又良智の愛敬百物正しく一併と我
手是正するは是正治の事あり

平愈しあつて止まると人ぬ病
 と療むるに能く善く道すとの意
 業に於て過に聞人も良薬は苦
 きに厭はるる病は利あるまは
 りて過に想も人に向て蓋藏
 師は達しく其病をうくせしむる心
 光明に日月ありて自ら解く

念とて格す
備玄履之記
 御徒編

一 一言一思一書物と写し書落
 一 筆の有る方交をかり早く書仕已度
 一 おりふんより落しと思はし一字…に
 公とほけ書りて退出せす字とて落
 すまきなり司馬温公の通鑑とて
 大部の書と自学とてかきし一字も
 落すす一字も余りしとかり
苗蔭典刊

一元旦の山積初陸自筆の孝經なり忠
孝の山熱物山洋に是れなりと年以第一
の山規式なり今以て元旦の山熱物
やうなり吉備烈云遺事

一山書もの始々天下春平儒道奥の
文字と云はれよ同上

一山山硯箱の蓋は鈿嵌はる懈公一生自
暴自棄舉世譽不益進舉世毀不益退

と山言葉と彫らせ給へり君則

一君甚書法と好まされし山冠の山り
青蓮院宮宮紙親まゝ山學ハせたまへり
後山中華の古法帖と暮し給ふ山文成
公の客座私説の石刊の中山山字缺く有
けり山補書したまへり今山宮山石
刻の山風あり山君の補書ありと山
と辨識する者なり誓徳編

一 公ハ殊更ニ射法ト好セニキム也右間の傍ニ
卷藁ナシキありら組の弦音と聞台ら組二
十人成撰み々々麾下ニハ復是と往昔の新田
左中将義貞の十六騎の黨ニ擬（らきた
）であるとき山川重席在焉ともいふ百村の
猶ふさ小いとき公九十五第りくさや娘の
重席在焉九十六第ありけき公のらと
重席在焉一湯りりりふとなく又百村の

然しとあり重席在焉曰おるさう公九十六
第中らとよみて重席在焉九十五第中り
けき公今日ハ予ハ勝たさうい猶めら
出さし作けき公重席在焉先ハ湯りり
らと出さ公九十六日汝ハありたさかり
別のらと出さし作けき公重席在焉
いやは外よりハかしとせしふささ
返しありふさ及ハすし作しと

きう令々山川金左衛門の家々秘苑の
りとせり吉備公遺事

一 君常々音楽と好まされたまひあはれし中
秋三五の月見のこめ水邊に藤みはよ
よ俄よゆ少く名月朧たり公近侍命
せりて林歌の曲と奏し侍人よ不とりく
空も晴月もさや照る君悦ばよ
しきりけりし君も時ハ望とあはれ

け系 誓徒編

一 京より樂人よとて近侍者未議彼理産
田於監三人身う士大夫子樂と学はせたまふ
君よ六珠よ笛と好まされ侍り君の横笛
名つけんると中院内府通茂々清せ
たまひしよ芦田鶴と名とつけらまはる
空よりけり澤よとてさかたひ

雲の芦田鶴あはけぬらん

とつる新くよまきふりけ留とせ出ぬ
よ昔くらきりけい

天子の山笛の所範たりし彼芦田鶴
天子の山物となりぬ 誓徒編

一 公卿カよふと法かしきも後十四等も
花ハよきも存たる者もるあ。よき
佐後子孫ろく山刀於甚重とて山亦
成よき山も山許答ふよきと以再三

山亦山の上進をらまはるく作らまは
非カよふ用よえりさす山佐後子孫いや
未愈よ取よしり作らるさ山つそ力
と見へりしとと蠟燭と五挺横よふと
下燈し甚盤しめふき消るす状
半山山自滿の山歌とふと云由後之あ
アしと人蠟燭と七挺の反舌鳥と蛇し
並く甚盤とトしと山とけまき山山

憐れ〜四角〜なるまゝ〜ゆ〜作〜や〜は〜
元〜六横〜並〜盤とよ〜う〜と〜角〜き〜
さ〜ま〜文〜の〜憐〜の〜活〜く〜の〜想〜体〜力〜と〜よ〜の〜そ
形〜す〜す〜し〜き〜もの〜ふ〜わ〜は〜山〜畢〜竟〜後
る〜縁〜け〜と〜き〜い〜系〜繋〜ぎ〜は〜格〜さ〜の〜活〜力〜さ〜つ
ろ〜の〜山〜振〜子〜と〜山〜割〜止〜格〜さ〜の〜活〜力〜さ〜つ
通〜し〜格〜さ〜と〜山〜割〜止〜格〜さ〜と〜山〜割〜止〜格〜さ〜と
山〜割〜の〜去〜も〜降〜ん〜後〜の〜山〜割〜止〜格〜さ〜と

し〜き〜な〜し〜 有斐録

一 綱政公女中、瘧持者〜し〜次〜片〜栄〜耀〜
る〜り〜く〜片〜障〜子〜の〜明〜け〜た〜く〜も〜瘧〜持〜者〜
り〜は〜山〜割〜止〜格〜さ〜と〜山〜割〜止〜格〜さ〜と
あ〜る〜事〜な〜り〜し〜あ〜る〜事〜な〜り〜し〜
片〜廟〜の〜る〜場〜も〜く〜種〜々〜島〜嶽〜砲〜山〜割〜止
あ〜る〜事〜な〜り〜し〜あ〜る〜事〜な〜り〜し〜
あ〜る〜事〜な〜り〜し〜あ〜る〜事〜な〜り〜し〜
あ〜る〜事〜な〜り〜し〜あ〜る〜事〜な〜り〜し〜

ゆき〜又一説よ厚身の時より又四海
よりと四自身強薬よりあり六より一
〜より吉備烈公遺事

一 公山歿あり〜四隠右寛文十二年の夏六
月より山家督綱政公へ山譲りあり四隠
右於後七半年不六江戸へ山出府より
啓らせり〜す山有るふと山津領あり
〜山旅中も山報せの上意あり〜
有斐録

一 山隠右の後西の序九へ移らせたり〜
山蚊帳の殆ど山自身勸せよ〜とあり
ハ〜と是より事足りぬ〜の〜山公り

夜〜山古物茶羽二重の外なり〜
吉備烈公遺事

一 西山丸山海へ鴨沢山へ右ありととき此
田大雪山山麓と山供より〜早うは校間より
鴨と山持たすれハ能ハ山願〜より上り
是ハ山聞あり〜は遠ハ別〜堅き法交場

伊豫守及より一許、是をなきて、我等自
申し、公の御事、公に托せし、公入大學
由り、御本及く出志りの後、公在
よも公附り、私もの公附けり、
く、公の御事、公に托せし、公
ま、公の御事、公に托せし、公
ま、公の御事、公に托せし、公
公や、公の御事、公に托せし、公

よも公附り、私もの公附けり、
く、公の御事、公に托せし、公
ま、公の御事、公に托せし、公
ま、公の御事、公に托せし、公
公や、公の御事、公に托せし、公
よも公附り、私もの公附けり、
く、公の御事、公に托せし、公
ま、公の御事、公に托せし、公
ま、公の御事、公に托せし、公
公や、公の御事、公に托せし、公

舊徳編

一 曹源公由代、或士傍筆と切り、長倚
ま、退去、一たり、質、一、親と捕へ

らる彼士長崎よりいよとて少く
と備前へ去るに私後先日何某と切
逃をりしに親とて捕揚りや作
付らき此後迷惑仕ゆつき今長崎より
私よりいよの口免後後とて誰有
存しよるをくくし流し大亭と姑く
いよ公の玉をりしとて去の一命と全

く一為やいよと評定しとて決意な
くよく伺いし何とて思古き而西の
此名よ芳烈公の隠居よつとては此方
後より時作し我等家来の者よ孫
くぬ事なり皆そとつかり傍輩とあ
やめし一切腹中付し外のり若る事
と作し切腹作付しとて
備陽武義
雑法
一あつとていよの右側よ仔細方極付座

たゞ入るに池田大学を出入りしり
交事ゆとりけり仔細を極深し
此度とませ終つて存す小けき不苦
るしりてそまじり同く亦も作有
もつりし例しよ何やとりし志り
その又終は去死刑の作身らまじり
なりしりそぬとりしときをぬりて作
らまじり大学退治しんとしけしりしり

大學しり終はたの先不とりしり
しりしりしりしりしりしりしりしり
ふしりしり云々しりしりしりしりしり
しりしり何やらんしりしりしりしりしり
終は去死刑の作身らまじりしりしり
まじりしりしりしりしりしりしりしり
終は去死刑のしりしりしりしりしり
切のりしりしりしりしりしりしりしり

ひよりさてくあやうきつるなり及もどく
そまも同くするも其の履はふまといけ大
切よつこきよよとく悦ひ示教あまひ
身は迷惑し汗衣と透しりる分君則
一 君の隠括はつこき西名よあせらまき
近侍の吾き考ま作らまき山袴の茶紐
と結ふま袴腰とわく紐と茶紐と
結ふまあく左右ともま本紐の上

よりト通し又トくよく取く川
一の結い直し先年興國公播州よ
あせらまき山袴林岡某とらまの道楽
のよま袴の茶紐と切られ袴腰とく
落夫と踏下例と手もななく切ふま
喧嘩の爲し聞きあは公といひ
かくれこく侍へし物活なり松平徳編
一 由隠括以後西名く山名中最早

堂の時分と作小と伊豫と孫守百と小
下五と作舟と速早速の夏や田舎へ
放さきとと夜山後わくく山不審
ある火くもの生ゆるゆとりと山百姓の
堂一たる堂の願ふゆる山意あり同上

一 伊病中と素丸と山好と松のさしと市
よ、懸丸不自中つと山田英作家
よ出来たらと秋と山好のものかきと

名と山後山後わくく先山廟へ供へ小
やと作らきとと後百よと山一生のり
ち山廟と山好松と山好と山好と

山病中丸と山好松と山好と山好と山好と山好と
山菓子の内へかき山好と秋と山好と山好と
の初と山好の年数のうち山好と山好と山好と
他家より指出ひり山好と山好と山好と山好と
出すに山好と山好の山好と山好と山好と山好と

少る可し〜今も通るなり 有斐録

一 公の病氣甚大切及ハ後ハ人とせしとき
大坂の醫伴北山壽庵と百治と壽庵
来り〜診し〜退〜款〜して大なる識
君子なり血脈体の衰へさせたるは
のこ〜ま〜し〜し〜も血精神さ〜や
る〜せたるハ常人ハ異なり〜せたるは志
ともハ血脈作〜ハ血脈系治〜し〜

と〜マ〜血脈風の血質素〜る〜と感〜
候と流〜て爲りけり公初ハ鼻〜多
あり〜ハ振〜血脈重り後〜及〜血脈
血出〜したるハ脈道の子〜血脈
時〜天和二年壬戌五月廿二日岡山山西の馬
丸〜ハ血脈去あ〜と〜血脈中〜を
互町のものも〜血脈〜は〜血脈
明享年七十四年六月廿二日血脈敷土山〜

へりては山葬送儒法も古礼のこころ
山葬送の日記中一統本橋下足在出山んま
しつもの別まとわしつまふりや及ふ
土河のまもく流し山厚恩と載しその
あまの太徳在出し流しまふりつ
愁傷は流しぬる涙とて紙とて
拭いも紙とせき捨つるあまの教多く
下一面雪のこころも山葬送俗礼の

山法事ハ骨々少法もく山出櫃の仰も
僧法作の輩ハ骨々禁せしこころ山陽晴
下拜し骨々事ハ骨々寺領下
まふ古俗も密に自分よ山道第ハ在出
くく山陽くく山陽くく山陽くく山陽
山陽山陽徳の天り山陽今以存
骨々山陽ものな山陽也山陽前山陽中
のうら山陽改と山陽山陽山陽山陽

一 一やいふを九早といふもくも公の
以事と稱しとくさるゝのハを 君則

一 傳湯の大方も羽林君光政儒術と崇信
一 一始終一のこゝろ大和の麦日中
遺言一と曰く不翅歛葬喪祭遠志
一 一之とも亦浮屠と雜用しるるも
一 一の佛も惑いしるこゝろのこゝろ 岡隆華
記

一 君也一世國事と勤學はるる也

初ハ古学後ハ朱子学と稱いし也
子と稱せし一人とて大方と名とあり
一 一たも國中の人一人とて其澤と家
らさるるなり 徳徳編

一 或人の云く井園玄悦とてやとて
一 一云く温恭とて犯とて一とて
一 一親じ一とて言ひ志つ可と當り行ふ
一 一則よかると邦古今君子者と

少くは若君と稱せしけるふとんと
吉備烈公遺事

一 享保以来の事はや或士は戸淺草迄の
茶屋に腰かけ右に右に色々の老人
七十有條なるも其の事かけき亭より
やその元はは伝と何まこの家中とらん
らまはるる諸國の風俗能くふゆと
しふふふと月利しふふふと
彼翁よりや三十万石以上の家中

藤堂極もふとらん
大方長門彼の家中心いやく
自慢ふまも遠い傳彼家中
ゆつと老翁驚く件の傳封云
や一必の命は急らまはるる傳も殊
の外風儀習ふははるても傳古風
〜の家中心の風儀事いふつなりと仕り
能くふらまはるるはるるなり

少少侍前風も少し新衣席候代給きなき
此質素なるは風候に在り今も髪の上は衣
裳かやうも遠くは侍候をく

——角りりりなり 吉備烈公遠事



